

自我の向こうがわ

—ひとつの覚え書—

松下昌義

みちしるべ文庫 22



左京キリスト教会

はじめに

ここにおさめた文章は、一九八二年十月から一九八四年六月まで、私の個人誌「道」^{ロゼス}に、「もの見方・考え方—イエスさまの見方について—」という題で連載したものです。その後、連載が中断され、未完成のまま、いわば覚え書きとしてあったものを、今回・左京教会出版部が小冊子として下さいました。

この覚え書きに於て、皆さまとご一緒に考えたいと思つたことは、新約聖書が示すイエスさまの生きざまのよつて出て来る根源に、私たちが目を向ける、ということです。

中国のことわざに、「指が月をさすとき、指を見る者は馬鹿だ」、というのがあつた。つまり、大切なことは指を見るのではなく、指がさし示す月を見ることです。にもかかわらず、私たちは、その月を見ずして、指にとらわれていること、これは愚かなことであるといふのです。ここで指ということ、イエスさまの一つ一つの言葉や行いとするならば、私たちは、イエスさまの言葉や行いそれぞれ自体にとらわれているのではなく、その言葉や行いがさし示すもの、指すことをしっかりと見なくではならぬと思ひます。「聞く耳あるものは聞くがよい」とか、「目があつても見えないのか」(マルコ四・九、八・一八)などとイエスさまはたびたび申さ

れましたが、人々が言葉や行いのよって出て来る根源、言葉や行いがさし示すそのことに耳を傾け、目を向けることを願われたのです。

さらに、先の中国のことわざに於ける指とは、聖書に於ては、「しるし」ということに当てはめることが出来ます。イエスさまが、さまざまに「しるし」つまり、一般的に自然法則を破るような奇蹟を行ったということも、その奇蹟そのものにとらわれていては、そこからは何も生れては来ません。「しるし」とは、言うならば「月をさす指」であって、「しるし」がさし示すもの、「しるし」がよって出て来た根源に目や耳を向けねばならないのです。そのとき、人はそこに、神の限りない力と愛とを見るにちがいません。その意味で、「しるしは信仰に於て、そのしるたることが認識される場合には、正しく信仰と結びつく。信仰を離れ独立の意義を獲得するとき、それは信仰への妨げとなる。(マタイ一二・三八)——関根正雄」というのは全くその通りだと言えます。

加えて、ヨハネ福音書一四章一節以下を見ると、イエスさまが、私たちにご自分の言動のどこに目をつけてほしいと願っておられたかがよくわかります。即ち、「わたしが父(神)におり、父(神)がわたしにおられることを信じなさい。もしそれが信じられないならば、わざそのものよって信じなさい」と申されましたが、それは、わざそのものがさし示すことを見て下さいということでありましょう。

わたしたちは日常、相互に「我」の世界に生きています。「我」の世界とは、自分は自分によつて自分なのである。という自我を絶対とする世界であつて、自分以上のものを認めず、たとえ認めたとしても、自分のために認めるといふ自分中心性から一步も出ないのが「我」であります。

しかし、イエスさまは、そのような「我」に立つて言動はなさいませんでした。いつも、自分という存在の根柢に絶対的主体であると同時に絶対的他者である超越者、つまり、恵むものとしての神さまの働き、神さまのご支配を確実に知り、かつ見ておいでになり、そこに立ち、そこから言動され、その言動によつて「我」を越えてあるところの永遠的な恵む命、つまり、眞実をお示しになられたのであります。

この小さな文章が、そういう意味で、私たちの「我」を超えたその底に厳として働く神さまの恵む命に、わたしたちの眼が少しでも聞けられ加えて、その恵む命にあずかる一助となれば、まことに幸いであります。

尚、上の文章を書くにあたって、そのおりおりに読書した本があり、それらに多くを教えられ、また、ときとして、それらの本の中で書かれた文章を、知らず知らずのうちに用いさせていただいていると思いますが、今は、ハッキリと記憶にありません。それらの本の著書に心より感謝します。

—
世間には、ものを見るに、いろいろな見方・考え方があ

しかし、今の世の人々は、そのほとんどが「科学的」な見方・考え方をすることが、もっとも正しいと信じているようである。

「科学的」に見る・考えるとは、ものを対象化して私が見るということで、別な言い方をすると、私という主観の立場からそれという対象化された客観をいろいろ分析し、客観にある「法則」を見つけ出し、そのものを説明するという見方、考え方である。

そして、見出した「法則」に従ってものごとを構成することを「技術」というのである。

「近代化」ということがよく言われるが、「近代化」とは「科学的」なものの見方・考え方によって生れたところの「技術文明」が、わたしたちの生活の只中に入り支配することを言うのである。

以上のように人間が自己の主観で、自己以外の客観を対象化してそのメカニズムをとりだし自由にその技術で科学的にあやつることができるという自信、自負ということがほかならぬ

「近代的自我の自覚」ということなのである。

つまり、人間は自^{みづか}からの理性の灯火を高くかかげて自然科学の分野は言うにおよばず、人文科学・社会科学の分野でも多くの成果を生みだして来たことは人々の知るところである。そし

て、これらの生みの親ともいふべきものは、近代ヨーロッパであつて、その点ではヨーロッパ文明に対しては感謝しなくてはならない。

ところが、今日「近代化」ということに多くの疑問がなげかけられ、不信の声が世界のあちこちで一般化するようになって来た。

「近代化は人間を本当に幸福にしてくれるのか」

「近代化は人間を一見幸福にしてくれそうに見えたが、その実不幸にしてしまうのではないか」

「近代化ということの中に、何か根本的に大切な一事が忘れられていたのではないか」

こうした疑問は、その実近代ヨーロッパが人間に教え与えたところの「近代的自我の自覚」そのものへの疑問にはかならないのである。

人間が「進歩」という概念をもつたのは「近代的自我の自覚」と同時であつた。ということでは、近代化への疑問は「進歩」への緊問だと言える。

人々が「近代的自我」に自信をもち自負して進歩にひたつていたとき、すでに近代的自我の思想の中に「病」を見ていた人がいた。それは申すまでもなく、キエルケゴールであり、ニーチェなどである。マルクスもその一人であつた。

近代的自我の自覚とは自立の思想である。人間が人間自身の能力を他のいずれに勝つて正し

いと信じて疑わない思想である。

人間自身を主観の立場にすえて、すべてを客観の対象として分析的に見たり、考えたりする方法は、はたして正しく確かなのだろうか。

二

人間自身を主観の立場にすえて、すべてを客観の対象として分析的に見たり考えたりする方法に於て、忘れ去られている大切な一事がある。それは、対象化されない主体自身である。

つまり、*我*という主観ですべてを見、考えて行くと、*我*自身を見おとしてしまう。

もう少しくわしく言うと、近代的自我の自覚に於て忘れられていたことは、自我を中心にしてやってしまうことによって、自我自身を自我の相に於て問題にしようとしなかったということである。

自我自身を自我の相に於て問題にしないということは、中世的な自我の認識に於ても同じである。つまり、神による他律の下にあることが自我の在り方の最も正しい在り方だと考え信じて疑わなかったということが、それを証明する。

このことは、先述のごとく近代的な自我の自律に於ても同じことが言える。

要するに、中世的他律であれ、近代的な自律であれ、自我自身を自我の相に於て問題にする

ことを忘れてしまった結果、人間存在の根抵、又は存在一般の根抵を正しく自覚するに至らなかったと言える。

では、自我自身を自我の相に於て問題にするとは、どういうことを言うのだろうか。

ここにこそ、イエスのものの見方、考え方を問う理由があるのである。

しかし、イエスのものの見方、考え方に目を向ける前に、今一つハッキリとさせておかねばならぬことがある。

それは、自己が自己を対象化して分析的又は反省的に見たり、考えたりする態度をも近代的自我の「自覚」に含まれるということである。

自己が自分自身を深く内省し反省に至るといふ態度は、一見謙虚な態度の如くに見えるが、その実その態度は、はなはだしい「我」の態度・自律の態度の何ものでもない。

自己が自己自身を対象化して考え、見る限り、やはり自己を主観の立場にすえて、自己自身を客観的对象と化している。やはり、この態度も近代的自律、又は自立の態度の何ものでもない。

さらに、今一つハッキリさせておかなければならぬことは、自己を主観の立場に立てず、神を主として立て、神の前での自己を神にあって内省し反省する立場は、自己を主とせず、一見信仰深い宗教的な謙虚に見えるが、その実、その態度は中世的な他律以外の何ものでもない。

中世的他律は、神を対象化し、その対象化した神の下にあることを最も正しい自己の在り方として自己をとらえる。

しかし、対象化された神は、もはや神ではない。なぜなら、対象化とは自己にとって客観的存在であり、神は自己にとって客観的存在、つまり主観・客観の関係の中ではとらえられるものではないからである。

三

「主観主義」という言葉がある。それは、人が自己の主観に於てすべてを対象的に「客観化」してしまふことを言う。この場合の客観化とは、自己の考え、思いの枠組の中へすべての対象をはめ込んで客観としてしまふということである。

主観主義の恐ろしさは、すべてを自我にとって都合のよいように、即ち自我にとっての効用のために、それらを仕立てあげるということである。これこそ正に科学であり、技術といわれるものにほかならない。

このような主観主義に立つ自我こそ近代的な自我にはかならない。

しかし、こうした主観主義的な自我は近代に於て現われて来たものではなくて、それは、すでに人間そのものの中に存在していたところの、非本来的人間性でなかったかと考えられるの

である。なぜなら、この主観主義的自我こそ、その実それはエゴイズムにほかならないからである。

すべてを自己の効用のために客観化する。すべてを自己の効用のために仕立てあげる科学技術は、世界を狭めたのみでなく、均一化し、さらに自然を破壊し、今やすべての存在そのものに危機を招かせしめてしまった。

資本主義の精神が本来どのような内容のものであったとしても、現実の資本主義体制は主観主義にもとづく科学技術を用い、それに支えられて推進されて来たことは否めない事実である。その結果政治的には植民地獲得のための争いが世界戦争となって生じ、現在も姿を変えてはいても存在しつづけている。

このように科学技術とその思想に支えられて高度に発達した資本主義の成立は、世界や人間の均一化、つまり一体化と平均化をもたらし、すべての人間が同じものを食べ、同じものを身にまとい、同じ考えをもち、同じような与えられた欲望の処理のしかたをする大衆となつてしまった。

大衆化とは集団の機構化ということであり、そこでは個人は機構全体がどのような方向に向っているかは問わず、ただ与えられた目前の仕事を自から部品としてよく動いていればよいこととなる。

機構の中の一部品として平均化され物量化されて、全く人間疎外されてしまった人間が自身自身の存在に不安を覚え危機を感じるのは当然と言えよう。

しかし、考えてみるとこうした不安と危機を人間にもたらしたのは、ほかでもなく人間自身なのである。そして、それを反省してゆくと必ずすでに述べて来たごとく「主観主義」的な考え方に由来するものであることに気づくのである。

それ故に、問題は、いかにしてこの主観主義的な考え方を克服し得るかということである。そして、主観主義が人間のエゴイズムの結果だとすれば、本当の問題はエゴイズムの克服こそ一大事なのである。

ここにイエスさまの考え方見方を深く問う根本的理由があるのである。

四

近代的自我の自覚に於て忘れられていたことは、自我を中心にするにすえてしまうことによつて、自我自身を自我の相に於て問題にしようとしなかつたことである。と先に言ったが、それは直接の自我定立が問題だということである。すなわち、自我自身を自我以外の一切から切り離して自我自身でありうるといふ在り方である。この主観主義的態度こそエゴイズムそのものにはかならない。なぜなら「エゴイズムとは自我自身を神との関係から、また他人格との関係から

切り離し、自我に好ましい自己の姿を自分で設定して、このような自己を実現するとともに他者にも押しつける働きの全体のことである」からである。

自我に好ましい自己の姿を自分で設定して、そのような自己を実現しようとする自己同一性のふるまいは理想主義となつて現れてくる。つまり、自分が望ましいと考え、思い、願う自己を自分の対象として立て、それに向つて、それを実現するために努力する。ときとして、その望ましいものが神として虚構され宗教となる。これらは結局自我が自我に恋をし、自我が自我を対象化して礼拝をしている一種の自我愛なのである。そして、それが他者にも強要されるとき水平化・均一化が生じる。

勿論、こうした自我実現の過程で多くの文化的価値が生み出されて来るし事実生み出されて来た。しかし、人間が人間として在るべき在りようから、それを見るととき人間の在るべき在りようではないことが理解される。このような人間の在りようの構造に一步早く気づいた一人が先に名を上げたニーチェであったことは知る人は知っている。

結局、そこで全く忘れ去られていることは、自我自身を直接定立することによって、自我の相で自我を問うことをしなかつたということである。それはとりもなおさず、自我否定なき自己定立であるということである。

以上のように反省して来て明確になつた一つのことは、近代的自我・主観主義・エゴイズム

と言われるそれらが、それ自身もつ問題は自己否定を過ずして直接に自己定立するということである。このことを一口に言うに「自己は自我のみによって自己である」ということになる。しかし、この在り方は完全なるニヒリズムにはかならない。なぜならば、自我は自我自身によって支えられ得ないからである。このことは第一次、第二次の世界大戦を体験し、さらにベトナム戦争以後最近のパレスチナ問題をめぐって起っている数々の出来事に於て、いよいよ従来人々がよりかかり、信じて来た価値体系の指導原理としての人間理性に対する不信・不安・崩壊を認めざるを得なくなり終末論が台頭しニヒリズム現象が一層明確化しつつある。一方それを受けて先述の如き、その実自我自身による虚構にしかすぎない神が生み出され、それへの自己同一化によってニヒリズムからの救済を求めるあわれなる人々と憑かなる宗教とが満ち満ちている。

しかし、そこには人間の救いはない。

五

イエスさまは、いかなる意味に於ても主観主義にはたたれない。否、むしろ、主観主義こそ人間を非人間化し、人間をその根底から崩壊させてしまうものであることを示され、そのような自我を捨て、そのような自我に死ぬことを提示される。

「自分を捨てて……わたしに従って来なさい」（マルコ 8・34 他）

「一粒の麦が地におちて死ななければ……」（ヨハネ 12・24）

イエスさまは、死ぬことが生きることであり、捨てることが得ることだと申される。

「このころの貧しい人はさいわいである」（マタイ 5・3）とも申される。

しかし、人は主観主義的自己に死ねば一切は無となると考えている。自己自身が生きる道は自我を強め、拡大させ、延伸させることによるのみ自己は保持出来ると信じて疑うことを知らない。

その意味で主観主義的自己に生きることは、常に、思いわずらい、の生であるといえる。なぜなら、いつも関心は自我自身についてであり、いかにして自我を強め、拡大させ、延伸させることによって、自我の生を充実できるかということだからである。そして、そのために自我以外の一切を客観化し道具化してしまうのである。つまり、主観主義的自己の生き方は、つまるところ、エゴイズム、の生き方なのである。

イエスさまは、パリサイ人たちの律法主義的宗教を強く批判された。それは彼らが神に従うとは律法を守ることであり、律法を守ることは神の前に自我を正しく生かすことだ。と信じたからであり、正にこれこそ律法を道具化し、客観化して自我を強め、自我を拡大させ、延伸させようとする自我についての思いわずらいであり、エゴイズム以外の何ものでもあり得ないの

である。そこで、どれほど敬虔の仮面をつけて神の名を呼ぼうと、それは偽善以外の何ものでもないのである。

「偽善なる律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。あなたがたは白く塗った墓に似ている。外側は美しく見えるが、内側は死人の骨や、あらゆる不潔なものでいっぱいである。このようにあなたがたも、外側は人に正しく見えるが、内側は偽善と不法とでいっぱいである」(マタイ6・27・28)

「また祈るとき、偽善者たちのようにするな。彼らは人に見せようとして、会堂や大通りのつじつじに立って祈ることを好む」(マタイ6・5)

右のようなイエスさまの言葉をあげれば他にいくらかもある。要するに彼らが、いかなる敬虔の仮面を身につけ神を口にし、祈りを口にしようとも、それは自我を強め、自我を拡大させ、延伸させることにすべての関心がそがれ、それについての思いわずらい以外の何ものでないのである。

しかし、ついで彼らはそのことについて盲目であり、自からは神の正義に生きていると信じて疑わなかったのである。これが主観主義の実態なのである。

自我が自己の底だと思ひ込んでいる。自我の崩壊は自己の崩壊だと信じている。それ故に、自我に自己自身が止まり、自我にこだわりつけ、さらに自我を拡大させ延伸させ強めることによって、より確実に自己自身を確立せしめられると思ひ込んで来たのが、とりもなおさず近代的自我であった。

しかし、イエスさまは、自我が自己の底ではないのだ、と申される。

では、イエスさまは、何を自己の底だと人に示されるのかというところ、それは神の支配だと示される。そのことを具体的に山上の教えで語っていられる。

「だから、わたしは言う。何を食べようかと命のことを心配したり、また何を着ようかと体のことを心配するな。……空の鳥を見てごらん。まかず、刈らず、倉にしまいこむこともしないのに、天の父上はそれを養ってくださるのである。……あなたたちのうちのだけれが、心配して寿命を一寸でも延ばすことが出来るのか。……野の花の育つのを、よく見てごらん。……しかしわたしは言う……きょうは花咲き、あすは畑に投げ込まれる野の草でさえ、神はこんなに装ってくださるからには、ましてあなた達はなおさらのことではないか。信仰の小さい人たちよ！……心配するな……あなた達の天の父上は、それが皆あなた達に必要なことをよくご承知である。あなた達は何よりも、御国（神の支配）と神に義とされること（神の支

配が現にあり、脚下にあることの確認)を求めよ。……だから、あしたのことを心配するな。あしたはあしたが自分で(神の支配それ自身が)心配する。一日の苦勞はその日の分で沢山である。——マタイ福音書6章25-34——塚本虎二訳(岩波文庫)但し()は松下記——

このようにイエスさまは、自己の底が神の支配だと示されるが、その底である神の支配は、自己のみならず、存在者一般の底であると示されるのである。

ここでは「自己は自我のみによって自己である」という認識が根底から破られ否定されている、と同時に「鳥は鳥自身によって鳥である」という認識も「花は花自身によって花である」という認識も破られ否定されている。

しかし、よく注意しなければならぬことは、ただの否定ではなく、「人を人へと現成せしめるのは神の支配である」、「鳥を鳥へと現成せしめるのは神の支配である」、「花を花へと現成せしめるのは神の支配である」という事実が示されてあるのである。

と考えると、神の支配から近代的自我を見ると、自己の底に自我を見ようとすることは、有りもしないものを有りとするようなものだとと言える。実は自我など無いのである。自己を自己たらしめる自我など無いのである。にもかかわらず、有りとすることに、さらに有りもしないものを拡大、延伸さそうとすることに、人間の愚かがあり、聖書のいう罪があるのである。

イエスさまは申されます。「あなたは髪の毛一本を、白くも黒くも出来ないものであるから。あなたたちはただはつきり、はい、とか、いいえ、とだけ言え。これ以上は悪魔が言わせるのである。」(マタイ5・36・37)と。

あるものをありと言ひ、ないものをないということは正しいことである。つまり、わたしたちが人間としてなさねばならぬことは、あるものをありと素直に認め受け入れ、それに従うところの、はい、という態度・生活・生き方であり、さらに、ないものをないと素直に認め、受けいれるところの、いいえ、という態度・生活・生き方である。

しかるに、自我とは、正まに自みづからの我がをたてて、あるものがあるとせず、加えてないものがあるとし、それを絶対視することにより、自分も他人もそれによってしばってしまおうとする。つまり、自我が自己の底、即ち自我が自己の究極の主体だと考え信じて疑はない。

すべてが自我からはじまるという認識そのものに対して、イエスさまは悪魔的な誤りを見られるのである。それ故に、「ただ今、見える、というから、あなたたちの罪はいつまでもなくなるならない。」(ヨハネ9・41)と自我に立つ人々に申される。

自我を自己の究極の主体だと考えるところでは、自我自身を自我の相に於て問題として問うことはない。

しかし、自己の底が神の支配だということに開眼せしめられるとき、自我そのものが、その実自我そのものによってつくられた主観であり、幻想にしかすぎないものであることに気づくのである。

イエスさまが語り示される神の支配とは、いのちのいなみそのものの世界であり現実なのである。だから、空の鳥を見よ、野の花を見よ、と申される。

いのちのいなみの世界は、はい、いいえ、の世界であり、正に自己とは、このいのちのいなみのはたらきであり、自我はそこに根ざして成り立って来るとき、本来的自我となる。(しかし、この場合の自我とは、自我であって自我でない自我だと言える。これについては後述する。)

人間は自我に固執する。すべてを自我によってかかえ込み、自我から何でも産み出す。すべての科学・技術・宗教・芸術・政治も経済も哲学も……一切を産む。宗教を律法化し、より強固な宗教をつくりあげたのがパリサイ人達であった。

神を自我によりかかえ込み、宗教として律法化し、それに生きることを命に生きるとした人々に向ってイエスさまは次のように申された。

「命を保とうとする者は、命を失い、命を失うものは生きながらえる。」(ルカ17・32)と。
自我が自己の底ではないのだ。自己の底は神の支配にあり、神の支配のいなみとしてはじ

めからあるものなのである。そして、自我はその事実に覚むるところに生れて来るのである。

八

自我が自己の底ではないのだ、と私が言うとき、どうしても記しておかなければならない私の一つの体験がある。

それは今から七年ほど前、即ち一九七六年の秋だったとおもう。当時新築になった教会の二階の奥の部屋で、わたしは坐して読書していたが、少しつかれたので庭の方の窓に頭を向けてうわむきによこになった。そのとき、ちょうど頭上ななめにある窓に目をやったとき、庭に植ってあるヒマラヤシーザーの木のこずえが、その背影に広がる大空と共に、自然に見えた。たしか青くすんだ大空には秋特有の小さな雲が、二・三浮かんでいたと思う。わたしは何おもうでもなく眺めていたのだが、その時突然わたし自身に一つの出来ごとが起った。正しくは、起ったというのは後から自覚したことなのだが。とにかく、ヒマラヤシーザーと、それを眺めているわたし自身とが一つとなったのだ。そして、さらに雲とも一体となったのである。否、ヒマラヤシーザーも、わたしも、雲もなく一つになったと言うべきかもしれない。それが、どれほどの時間であったかは、全くわからない。ただ気がついたとき、わたしはおのずと一人ごとのようにつぶやいていた。「ああ、今までぼくはまちがっていた。まちがっていた。」と。それ

は、正にわたしにとっては、深い深い、くいあらための言葉であった。

一体、わたしは何がまちがっていたのか。それは、今まで、ヒマラヤシーザーはヒマラヤシーザー。雲は雲。わたしはわたしと思ひ込み、全く疑うことはなかった。ところが、実はヒマラヤシーザーも雲もわたしも一つなのである。これが存在の真実だったのだ、ということ。その真実に全く盲目であったという、まちがいに気づいたのである。

しかし、実はこの体験というか、発見というか、それはわたしの内深くに秘めて、ほとんどだれにも語ることはなかった。

その後一年ほどたって、禅者の鈴木大拙が杉との一体となる体験をした話など知るに及んで、あれが禅でいう悟りの体験というものの一つであったのかと知るようになった。

とにかく、二階での体験以後、新約聖書のイエスさまの語るところが以前より素直に受けられるようになったし、さらにそれまで今一つハッキリとしなかった道元や臨済の言うところの根本が理解できるようになった。また、八木誠一の見ているところも、何のわだかまりもなく共感出来るようになった。そして、青年時代に読んで全く歯がたたなかった西田哲学が提示している世界もまがりなりにわかるようになった。

それにしても、一体全体わたしは何を見たのだろうか、その後じょじょに明確になって来たことは、先述のごとく自我は自己の底ではなく、自我は幻想であり、自己とは根源のない

のちのいとなみそのものであることが見えて来たのである。そして、イエスさまがその生涯に於て提示したことは、ほかでもなくこの存在の根源のないのちの世界であるということが見えて来たのだ。

九

イエスさまの言動は、いつも私たちの常識の尺度を超えている。

例えば、「さて、イエスの母と兄弟たちが来て、外に立っていてイエスと呼ばせた。大勢の人がイエスのまわりに座っていたが、彼に言う「それ、母上と兄弟姉妹方が、外であなたをたずねておられます。」イエスは「わたしの母兄弟とはだれのことだ」と答えて、自分のまわりをとりまいて坐っている人々を見まわしながら言われる「ここに居るのが、わたしの母、わたしの兄弟だ。神の御心を行う者、それがわたしの兄弟、姉妹、母である。」(マルコ3・31―35)この場合、イエスさまは「自分の母、自分の兄弟」という、常識的な肉のつながりを超えている。

ここでイエスさまは、年老いた女をすべて自分の母のように思って愛し敬いなさい。又は、若い男女を自分の兄弟姉妹のように思って、愛しかかわりなさい。と言っていられるのではない。

つまり、自分の母でないけれども母のように、自分の兄弟姉妹ではないけれども兄弟姉妹のように思つて、愛し交わりなさいと言つてゐるのではない。それは、自我が生み出し、つくり出す理想としての自我の倫理的努力であり、自我の道德的努力であるにすぎない。ここでは、自我は少しも滅してはいない。それどころか、それは自我より発し、自我の理想を自己の在るべき姿として語り自我により自己を確立せしめようとする。これこそ律法主義的生にはかならない。これはしょせんエゴイズムの変形であり、その限りに於てそれは、常に偽善を含んでゐる。イエスさまが、律法主義に生きる人々を偽善と呼ばれたゆえんである。(マタイ23・11) 12) もし、偽善を含んでいないと言ふなら、そのような自我による努力を為してみるのがよい。必ず最後には行きまゐるにちがいない。常識の实体は、いつもこの程度のものなのだ。

先のイエスさまの言葉は、自我から発してゐるのではない。

では、イエスさまの言葉や行動はどこから発してゐるのだろうか。それはほかでもない、自我を超えた、存在の根源のないのちのいとなみそのものから、つまり神から発してゐるのだ。母も兄弟も未だ分別されてゐない、いのちのいとなみそのものから言葉されてゐるのである。

自我のいとなみは、自分の母、自分の兄弟、従つて、他人の母、他人の兄弟という自我の分別知によつてつくり出されたものであり、同時に自我の分別知によつて、自分の母と他人の母とが結び合され、自我の分別知によつて、自分の兄弟と他人の兄弟とが結び合される。

しかし、いのちの根源に立つとき、母も兄弟もない、自も他もない。そこでは、自は他であり、他は自である。さらに言うならば、男も女もない。ギリシヤ人もユダヤ人もない。(ガラテヤ3・28)

自我を超えて、自己を成り立たせるいのちの根源があり、自己を自己たらしめる一である。いのちのいとなみが先ず、すべてに先だつてある。イエスさまはここに立ち、ここから言葉となり、言葉されているのである。

十

自我とは、意識された自分であると共に、意識の主体としての我である。自分は自分であると保全するのも、この我である。だから、人は自我の崩壊を最も恐れる。自我の崩壊は、自分が自分であることを失うことであるからだ。どうあつても、自我は崩されてはならず、自我は自己保全のために一切の努力をする。「我」と言われるものすさまじさは、ここから出て来る。

しかし、イエスさまは、自我の崩壊は死ではなく、眞実の生だと申される。「この世で、自分の生命を憎む者は、それを保って永遠の命に至る」(ヨハネ12・25)即ち、自我をすてる道は、自我を救う道だと申される。「このころの貧しい人はさいわいである。天国は彼らのものだ

ある」とは、正にこの事実を最も美しく言葉したものである。

さて、姦淫をして神の律法を犯した女がいた。(ヨハネ8・31) 人々は、彼女を神の正義の名によって石打ちの刑を当然のこととして、イエスさまの前に連れて来た。

「さあ、どうする」

しかしイエスさまは沈黙するのみである。

人々は、

「さあ、どうする」

と執拗じじょうにイエスさまに迫る。

しばらくして、イエスさまは、やおら立ち上られた。一しゅん深い静じゃくがその場を走った。人々の全身がイエスさまを凝視した。その時イエスさまは言葉された。

「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」(ヨハネ8・7)

正にこの言葉は「杭のように大地にぐさりと垂直に突きささり、そこを通ろうにも、容易に通れない、通ることを許さない言葉」である。また「人に、そこに立ち止ることを要求し、解決がつかねば、そこを絶対に通り越して行くことが出来ぬ」言葉である。

このイエスさまの言葉は、人々の自我をつきぬけ、自我を支えている真実の自己を打ち、真実の自己を呼びさすに至ったのである。

「これを聞くと、彼らは年寄から始めて、ひとりびとり出て行つた」（ヨハネ 8・8）
人々は、はじめて自我をつきぬけ、己れの存在の根底である自己にとどき、ひびく言葉を聞いたのである。

人は日常、自我で言葉を聞き、自我より言葉を発している。つまり、人の日常は自我と自我のぶつかり合いの連続である。それは、どこまで行つても平行を保つて、決して交わることはない。時として交わるように見えるが、それは相互に自我の利益が得られ、自我が拡大され、自我がより強くされる時のみである。それは、交わりではない。だからイエスさまは申される。「兄弟だけにあいさつをしたからとて、なんのすぐれた事をしてるだろうか。そのようなことはだれでもしているではないか」（マタイ 5・47）と。

自我をつきぬけ、自己の底に至る言葉とはどんな言葉なのだろうか。

一

自我をつきぬけ自己の底に至る言葉とは、自我から発した言葉ではない。自我から発した言葉とは、有から発した言葉であり、二元相対から発した言葉である。

自我をつきぬけ自己の底に至る言葉とは、有無を超えた無から発した言葉である。それは無心の言葉である。それは「幼子の心」（マタイ 18・3・4）の言葉である。全く執われから開

放された自由自在なる言葉である。またそれは、かぎりなく広がる言葉である。アルハでありオメガである言葉である。(詩19・114)

「罪なき者、先ず、この女に石をなげつけるがよい」(ヨハネ8・7)これを、自我が自我に対して自我の反省を、うながす言葉として受けとるならば、未だその者は自我にとらわれている。それは、まやかしである。だいたい、反省とはそもそもまやかしなのである。なぜならそれは自我が自我に向って、自我を告発する作業であるからだ。言うならば、それは馴れ合いの反省であって、最後には合理化し軽くつをつけて平然としていられるようになるか、さもなければ、同じ反省を一年中口にして、結局すませてしまうことになる。「神さまおゆるし下さい。」と一言祈れば、いつもすべてはすむという類いのものである。

「これを聞くと、彼らは年寄から始めて、ひとりびひとり出て行った」とある。「罪なき者、先ず、この女に石をなげつけるがよい」という。その言葉自体は自我から発したものでなくとも、それを受けとるものが、自我で受け取ってしまった、ということが、ここで起ったのだ。彼らは、一瞬自我による反省でひるんだが、「今日のところは、ひとまず引きあげよう」と、ますます敵意と闘志を燃やしつつ去って行ったにちがいない。しかし、おそらく自我の中でいくらかき消し、払いのけても、いつまでもよみがえって来たであろう言葉を、彼らは聞いてしまったのである。

自我をつきぬけ自己の底に至る言葉は、自我がどれほど自分の都合のよいように合理化しても、決して完全に払いのけることが出来ぬ言葉である。なぜなら、それはすでに自己の一部として始めよりあったものであり、ありつつける事実だからである。即ち、**真・実**とはこの事実をいうのである。

イエスさまの言葉は、この真実の言葉なのである。「イエスさまそのものがその真実の言葉「ロゴス」なのである。これ即ち、ヨハネが「言葉は**肉**体となった」と言い、それは「初めからあった」（ヨハネ 1・14）と言うゆえんである。

一体、イエス様が語られたと言われる、かの山上の教えの言葉が、なぜ世の人々のところをとらえるのだらうか。それはほかでもない、自我を超えて自己にひびくからである。それは、自我の産物としての主義を説いているでもないし、自我による主張でもない。哲学でも宗教でもない。キリスト教の言葉では勿論ない。それは事実なのである。真実の言葉（ロゴス）であるからである。

一一

払いのけても払いのけても、そのひびきがいつまでも残る言葉がある。つまり、自我によつて否定できない言葉がある。例えば「人をさばくな」（マタイ 7・1）と言われるイエスさま

の言葉もその一つである。イエスさまは、この言葉に続けて次のように申される。

「自分がさばかれないためである。あなたがたがさばくそのさばきで自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう。なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある梁を認めないのか。自分の目には梁があるのに、どうして兄弟にむかって、あなたの目からちりを取らせてください、と言えようか。偽善者よ、まず自分の目から梁を取りのけるがよい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取りのけることができるだろう」(マタイ7・1-5)

このイエスさまの言葉に対して、自我は分別知によって、何とでも反論出来る。しかし、反論しても反論しても尚反論し切れないものが、自分の内に残る。自分の内に残るとはどういうことなのか。それは、その言葉が自我をつきぬけて自己の底に達し、自己が共鳴し、そのひびきが自我を突き上げて来るからである。自己は本来、自己にあるものしか共鳴しない。イエスさまの言葉に自己が共鳴したのは、イエスさまの言葉が自我からでなく、自己の底より発したものだからだ。真実が真実に共鳴し、愛が愛に共鳴するのと同じように、真実の自己より発した言葉は真実の自己に共鳴するのだ。だから、真実が不真実になじまず、愛が愛なきものになじまぬごとく、真実の自己は自我になじまない。

「人をさばくな」という言葉は、すでに真実の自己にあったのだ。それは、語らず、言わず

とも、すでに天地にひびき、地のはてにまで及んでいたのだ。否、もっと厳密に言えば「人をさばくな」ということは無いし、さばく人も、さばかれる人も、もともと無いのだ。

「人をさばく」ということは、全く自我に属するものである。それゆえに（真実の）自己は自我になじまず、自我を突き上げ自我の非本来性を告発するとき、「人をさばくな」と自我には聞こえるのである。

さばくものがいて、人がさばかれるのではない。ましてや、さばくものにさばかれないうちに、「人をさばかない」のではない。それは二元相対から発した言動、自我の言動である。

さばくものなど、もともと、どこにもいないのだ。さばくものをつくり出すのは自我である。自我をつきぬけて自己の底、つまり真実の自己に立つとき、自我のゆがみが現成して来る。と同時に、自我のゆがみが無化されてしまう。無化されてしまうとは、その幻想性が明らかとなるということである。それは太陽の明りのもとでは、電球の光りが無化され、月の光り、星の光りが、その表、月や星固有の光りでなく、ただ月の光り星の光りを見るものの幻想にすぎないのと同じである。

一三

「人をさばくな」（マタイ7・1）「悪人に手向うな」（マタイ5・39）また「敵を愛せよ」

（マタイ 5・44）さらに「情欲をいだいて女を見るな」（マタイ 5・28）「兄弟に対して怒るな」（マタイ 5・22）という、これら一連のイエスさまの言葉は、自我から出たものではない。にもかかわらず、人は自我からの発語として受けとり理解しようとする。そのとき、これらの言葉は忽ち倫理や道徳的当為（為すべきこと、あるべきこと）として受けとられ理解されてしまう。自我はいつもこのようにして——自我同一性に於て——自我を定立しようとするのだ。つまり、自我が自己の理想像としてそれを立て、そのような自我実現に努力する。これが一般的な倫理や道徳の内容であり実態である。しかし、それはしよせん自我の幻想にしかすぎない。なぜなら、自我は決して自我によって自我であることはないからである。自我の底は眞実の自己なのだ。

にもかかわらず、伝統的キリスト教の多くは、これらのイエスさまの言葉を倫理として受けとった。その場合それは人間の罪深さを教示し、それによって人は自分の罪深さを自覚せしめられ、罪のゆるしのためのイエス・キリストによる 罪の十字架に目覚めさせられるためである（ロマ 3・20―26）というのだ。これはパウロからルターやルタ派につがれて来た。しかし、当のイエスさまはそんなことは言っておられない。そのように受けとり理解するのは律法主義的であり百点主義的である。

ここで、百点主義について少し説明をしておこう。百点主義とは端的に言えば、百点をとれ

ば合格し、それ以下の点数では不合格ということである。即ち、神の律法を完全に守れば救われて神の国に入ることが出来るが、律法を守ることが出来なければ、救われず神の国に入ることが出来ないということである。従って、百点主義とは律法主義のことである。それは自我の努力で自己を立てようとする自我同一性にもとずく自我実現にはかならない。しかし、イエスさまは、自我によって自己を立てようとする自我絶対化を問題とされるのだ。イエスさまは決して、人が百点をとることが出来ないから問題なのだとは申されない。むしろ、百点をとらねば合格しない。救われないと考えるその百点主義・律法主義そのものが問題なのだと言われる。百点をとって自己を救おうとする自我そのものが問題なのである。

ところが、人はその努力によって百点をとることが出来ない四十点の存在である。あと六十点不足しているゆえに不合格、つまり救われぬ存在である。だから、神がイエスに於て四十点の人に代って、不足分の六十点を補い神の前で人を百点として下さった。それゆえに、神に人を合格者と認められるようになったということが、イエスさまの十字架の贖罪理解だとすれば、それも結局は百点主義なのである。即ち、神は相変らず百点を人に求め、人は百点の合格点をイエスの贖罪死を利用して自我実現しようとする立場は、やはり百点主義・律法主義なのである。

先にも述べたごとくイエスさまが問題とされるのは、百点をとることが出来ないということではなく、百点をとって自己を立てようとする自我の在りようが、そもそも問題であると言われるのである。

実は、イエスさまはもともと百点主義、即ち律法主義など一言も語ってはいられない。百点主義・律法主義はどこまでも自我が産み出すものなのだ。とイエスさまは申される。「今あなたがたが見える」と言い張るところに、あなたがたの罪がある」(ヨハネ9・41)

自我が何かをしなければとはからう以前に、すでに先ず神の愛が神の恵みが事実として、すべてのものに及んでいると指示される。「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らして下さる」(マタイ5・45)。百点主義・律法主義によって自我は実現され自己は立つのではなく、すでに及んでいる神の恵み、神の愛によって自我は正しく実現され、自己は立つのだと申される。だから「思いわずらうな」と語られる。自我により自己を立てようとすることが、ほかならぬ「思いわずらい」だからである。「空の鳥を見よ」「野の花を見よ」「人の背丈」「人の頭の毛」に、人の「思いわずらい」に先んじて、すでに神の恵みとしての命の支配が事実として及んでおり、人にとって一大事は「先ず、この神の支配の事実に覚めることだ」とイエスさまは、全身これ指と化して指摘され

る。(マタイ 6・25-33)

自己は自己の底である神の支配によって、すでにそのはじめから立っており、今も立ち、今後も永遠に立ちつづけ終ることはないのである。この立ちつづける事実を「永遠の命」「キリスト」「ロゴス」「真実の自己」「本来の自己」「無相の自己」「絶対無」「光り」「真人」各人の成立の根底に本来平等に存する「原事実」(インマヌエルの原事実)、「般若即非」の事実、「絶対矛盾的自己同一」の事実、「即非的自己同一」の事実、「純粹直観」の事実、「統合」としての「場」の事実……等々と一般に言葉されているのである。そして、それらの事実の全き具現者として、そのものを生きられたイエスさまは、その事実を「わたし」と申されたのである。だから「わたしは命である」と言い、「わたしは真理である」と言われるのである。さらに「わたしははじめでありおわりである」「わたしを見た者は神を見たのである」「わたしにおれ」とも申される。

右の事実を開眼するとき、そこでは自我は無化され消滅する。自分もなく他人もない、はじめもなくおわりもない、創造もなく終末もない、汚れた人もなく清い人もない、罪人もなく義人もない、神殿もなく律法もない、敵もなく味方もない、死もなく生もない、得るもなく捨てるもない、動物もなく植物もない、海もなく陸もない。

この事実 directly イエスさまは、それ故に「一日の苦勞はその日一日で十分だ」(マタイ

一五

事実としての神の恵みの支配は、一切のはからいをつきぬけた「おのずから」の事実なのである。

イエスは言われた「神の国（神のお恵みの支配）は、ある人が地に種をまくようなものである。夜昼、寝起きしている間に、種は芽を出して育って行くが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。地はおのずから実を結ばせるもので、初めは芽、つぎに種、つぎに種の中にゆたかな実ができる」（マルコ4・26―28）。おのずからの事実とは、自ずから然る事実なのだ。また神が然らしむる事実という意味で、天の然らしむる天然なのである。いうならば、イエスさまは天然自然を生き、かつ証示したのである。つまり、イエスさまが全身で語り示す神の支配の事実とは、天然の事実であったのである。故に、人は天然自然の事実の前に立つとき、一切のはからいをすてて「ただ、しかし、しかし、否、否」と立つ以外に立ちようがないのである。そして「それ以上に出ることは、悪から来ること」になるのだ（マタイ5・37）ということに覚めるのである。つまりイエスさまが白い色を白いと言ひ、黒い色を黒いと、その事実に即して語られ示される素直さ、清さ、心のまじしさ、矛和さは、そのまま「敵を愛しましょう」

という言葉となるのだ。それはほかでもなく、天然自然のことなのである。

ここで「自然」について少し考えておこう。

「自然」というとき決って言われることは、西洋に於ける自然と東洋に於ける自然とは異なるということである。では、どう異なるのかというと、西洋に於ける自然とは、自己に対する客体的・对象的なるものを指して言うのに対して、特に日本に於ける自然とは古来、西洋に於けるように客観的对象的な自然というものは存在しなかった。（大野晋氏）日本人にとって自然とは、「自然というものを客体的総称名詞として立てて花鳥山水をその中に一括するかわりに、自然のひとこまひとこまを、いわば自己の主観的情態性の面に反映させて、自然さ、という情感に於てみずからの心でそれを感じとってきた」と木村敏氏が言うのはなるほどとうなずける。

自然とは、日本人にとっては先にも述べたごとく自おのずから然しからしむるといふ情態性であるが自然とは一方に於て、自みづから然しからしむるとも読む。それは「おのずからのもの」を自分の方に引きよせ、自覚的に然らしむることを自みづから然しからしむると言うのである。

ここでとても大切なことに気づくのである。即ちイエスさまが語られる言葉は時として一見命令のように聞える。例えば「情欲をいだいて女を見る者はすでに姦淫をしたのである」（マタイ5・28）という言葉など「情欲をいだいて女を見るな」と命令されているように聞こえる。

しかしイエスさまは命令など全くしていられない。そこでは、人間と人間との自然な事実としてのかかわりの基本を示していられるのである。

一六

人は、人との関わりに於て人たり得る、自分は他人との関わりに於て自分たり得るようにならざるに在るのであり、在らしめられているのだ。従って、男は女を情欲するためにのみ関わるのではなく、また女は男を情欲するためにのみ関わるのではない。それ以前に男と女との関わりも人が人と成るためには、人との関わりに於て成るのだという創造に於ける自然の事実——神の然らしめるところをおのずから然る——が厳として定めとしてあるのだ。その根源的定めを無視して、情欲という情動のみで男と女とが見限ることは、人が本当に人、または自分が本当に自分となることは出来ないということ、イエスさまは指摘されるのである。即ち、イエスさまは、人が人となる根本的事実、それは男性と女性とが分れる以前の事実を見て、その事実を立ててそこから言葉されていられるのである。従って人が情欲をもつことが悪いとか善いとかを語っていられるのではない。

イエスさまがどこに立って言葉されているのかということ、一層明らかにするための助けとなるのは、旧約聖書創世記の祭司典による、人間創造の記事である。(創世記2・18―25)

それによると、アダム（男）に対してエバ（女）がつくられた事情は、「人がひとりであるのはよくない。彼のためにふさわしい助け手」として「アダムのあばらの一つをとってつくられた」とある。つまり、エバ（女）は本来アダム（男）であり、アダム（男）は本来エバ（女）なのである。そしてアダム（男）即ち「わたし」はエバ「女」である「あなた」に出会うとき、「これこそ、ついにわたしの骨の骨、わたしの肉の肉」と歓喜の声を上げる。これは、アダムがアダムになった喜びであり、わたしがわたしに成った喜びなのである。

人はもともと「わたし」だけで「わたし」なのではない。「わたし」は「あなた」との出会いによって「わたし」と成るのである。しかし人は「わたしによって、わたしはわたしなのだ」と思い込んでいる。これは自我の世界の何ものでもない。「わたしは、わたしによってわたしなのだ」という思い込みは、エゴイズムの元凶である。このエゴイズムの思い込みの上に立っている人間が、どれほどの科学、技術、芸術、文化を築きあげようとも一切はむなし。またこのエゴイズムを基にして、どれほどの思想を生み、政治の理想や道徳倫理が説かれようとも、しょせんは悲しい夢である。

「わたしはわたしであって、わたし以外の何者でもない」と人が自己同一性に立って人と相対するとき、人と人とは永久に交わることがない。それは「わたし」は永久に「わたし」に成ることは出来ない。なぜならば、「わたし」は「あなた」に出会って「わたし」に成ると同時

に、「あなた」も「あなた」に成れるからである。創世記祭司典のアダム（男）よりエバ（女）がつくられた物語りは、この人間存在の事実性・真実性即ち、創造に於ける人間の自然を示しているのである。

一七

わたしたちは一般に「わたし」に対する者を「あなた」と呼んでいる。しかし、当の「あなた」から「わたし」に対するとき、「あなた」が「わたし」となり、「わたし」は「あなた」となる。このことは当り前のようであって実は当り前ではない。それは、当の人は本質的に少しも変ってはいないにもかかわらず、「あなた」となったり「わたし」となったりする。

一体、わたしは「わたし」なのか「あなた」なのか、どちらが本当のわたしのだろうかと考えてみることは大切である。実は「わたし」もわたしであり、「あなた」もわたしなのである。そうすると、わたしは「わたしあなた」なのだ。即ちわたしは「わたし」でありつつ即「あなた」なのである。また、わたしは「あなた」でありつつ即「わたし」なのである。更に、次のように言うことが出来る。「わたしはわたしでないからわたしなのだ」と。即ち、もともと「わたしはわたしによってわたしなのだ」ということに留まっている限りそれは幻想や観念のわたしであって、事実としてのわたしはそこにはない。

わたしはいつも「わたし」即「あなた」というところに事実として在るのである。故に、「わたし」と「あなた」は「多」でなく、それは本来「一」なのである。だから「わたしはわたしによってわたしである」といはいはるところでは、わたしは絶対に成り立たないのである。即ち自我が滅するとき真実の自己が現成するのだ。人間の創造に於ける自然は「一」だったのである。先の創世記のアダムとエバの物語りは、この人間存在の根源的事実について「それで人はその父母を離れて、女と結び合い一体となる。人とその妻とは、ふたりとも裸であったが恥ずかしいとは思わなかった」(2・24・25)と語っている。これは人間存在の「一」の事実、「創造に於ける人間の自然」を語っているのである。

さて、ここで「情欲をいだいて女を見る者は姦淫をしたのである」という。先にあげたイエスさまの言葉にもどろう。結局このイエスさまの言葉は「創造に於ける人間の自然」即ち「一」から言葉されているのである。「わたし」に対して「あなた」、「男」に対して「女」というかかわり方でなく、もっと根源的なわたしに於て「あなた」を見「女」を見よ、といわれるのである。その時、「わたし」と「あなた」との正しい関係が生まれ、「男」と「女」との正しい関係も生れるし、「わたし」は「わたし」となり、「あなた」は「あなた」となり、「男」は「男」となり、「女」は「女」となるのだ、とイエスさまは言われる。

しかし、「わたしはわたしによってわたしだ」という自我に生きる者には、イエスさまの言

葉が指し示す真実も、その言葉が出て来る根源的事実、即ちキリストもロゴスも見えない。これ「見ても見ず、聞いても聞かず悟らない」（マタイ13・13）とイエスさまが申されるゆえんである。

一八

わたしはわたしによってわたしなのではない。個はそれ自身に於て個であり得ない。個は多に於て個であり、多は個に於て多なのだ。例えば、1 2 3 4 5 …と数字を並べ、それをとなえてみるとよい。そのとき、1は2、2は2以前2以後、3は3以前3以後…の数字との関係の中で、それぞれの数字であり得るのであって、決して数字それ自身それぞれが他の数字と関係なく完全に、それ自身で独立していないし、ありやうがない。あるとすれば、それは抽象であり観念であって、決して実在ではないと言える。

以上のことは音楽に於ても言える。一つの音楽の流れは、音の多数の流れであるが、しかし必ず一つの音は、その音の前の音と次に来るべき音との間で音として成り立っており、そのようにして成り立っている多としての音の流れが、音楽なのである。

一つの音が、それ自身他の音と全く関係なく、個々に一音は一音で一音なのだという音の集りは、決して音楽とはならない。又実際そこには一音すらもないのである。というのは、一音

は全音の中での一音でもあるのだ。

一音が成就するとは、多音の中で成就するのである。別な言い方をすれば、一音が成就するとは、多音を全部背負って、また多音を全部含んで一音は成就するのだと言える。さらに今一步ふみ込んでみると、一音が成就するとは、出て来た多音を全部含んでいるばかりでなく、出るべきで出なかつた音をすべて含んで一音は成就しているとも言える。だから、一音を聞くとは全ての音を聞くことであり、さらには全存在を聞くことであるとも言える。ここに、音楽の普遍性と永遠性とがあり、音楽家はすべからず、このような一音を成就せしめようと、たずね求めるのだと思う。そして名曲とは、そのような一音が成就されているものに近いものであるうと思われる。

右のように、1も1であり、2も1であり、10も1であり、100も1であり……すべては実は1なのである。また一音は全音なのである。即ち「一即多」であり「多即一」であるということが創造に於ける自然なのである。これがロゴスであり、キリストなのである。そしてイエスキさまは、このキリストの自覚的な具現者であり、従ってキリストを生きた主体者である。

しかし、人は創造に於ける自然を、それとして受け入れず、1のみに、2のみに、3のみに……執らわれ、相互に自己主張をして止まない。創造に於ける自然は極めて不自然なことになって乱れる。これがほかでもなく罪であると同時に罪の結果なのである。

ところで、創造に於ける自然が神なのではない。創造に於ける自然は創造に於ける在り方なのである。その在り方が在ることの究極の根源が神なのであり、従ってその神の在り方に対する関係を創造に於ける自然と言ったのである。従って、罪とは在り方を受け入れないことであるから、それは神に対する罪となるのである。

一九

先に、創造に於ける自然とは、創造に於ける在り方の定めなのであり、その在り方の定めがあるということの究極の根源―それが創造にということである―が神なのである、と言った。従って神とは、創造者であると同時に恵むものであると言うことが出来る。なぜならば、定めがあるということは、人の一切のはからいを超え、ただ与えられてある以外の何ものでもないからである。

この創造に於て恵むものの現実を、イエスさまは「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らして下さる」(マタイ5・45)と語っていられる。

そして、その創造に於ける自然としての定めに、人が自覚的に従順であることを「義」と聖書は言っている。即ち、義とは旧約聖書に於ては一般に「あるべきさま」であり、新約聖書に

於ては一般に「御旨に従う」ということは、すでによく知られているところである。

ところで、その創造に於ける自然としての定め、人が自覚的に従順になることは、人のほからいによるのではなく、その自覚へ人を導いてゆくものの働きである。これを聖書は「聖霊」と言っている。「聖霊によらなければ、だれでも、イエスは主である」と言うことができない（コリント第一の手紙12・3）とパウロは言い、イエスさまも「聖霊によって私のわざを為している」（マタイ12・28）と申されている。聖霊によってこそ創造に於ける自然の定めが人々のうえにあらわとなるのであって、決して人の計い^{はか}努力によつてではない。（ロマ8・9―11・8・14―17・14・16―18）

結局イエスさまは、神・ロゴス・を聖霊に於て現わし生きた方だと言えり。つまり、イエスさまは、聖霊に於て、神の御旨に従い自然の定めなるロゴスを生きた方だと言えり。「わたしを見た者は父（神）を見たのである」（ヨハネ14・9）と言われ、さらに「わたしがあなたがたに話している言葉は、自分から話しているのではない。父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである」（ヨハネ14・10）

イエスさまは、創造に於ける自然として定めを聖霊によって示し、人がその定めを聖霊によって自己の深みで自覚せしめられることを願われ求められたのである。この定め、自覚的に従順であるとき、人は義人となる。義人となるとは、真の主体的な人となること、真人となるこ

とにほかならない。

しかし、人々は自我による自己完結を願って生きること余念がなく、そのうえに文化をきづくことによって幸いを得ようとしている。しかし、その営みは一切虚しい。

大切な一事は、自己完結的な自我が、聖霊に於いて破られ、創造に於ける自然の定めのように自我が生れ変わり立つとき全世界は一変し新しくなるのだ。

二十

イエスさまは、自我が悪いと言ってられるのではない。自己完結的な自我の在り方は、人間として本来の在り方ではない。といわれるのである。(ヨハネ9・41)問題は自我の在り方なのであって、自我を捨てることではない。

人が本来の自己に目覚るとき、自己完結的な自我はおのずと消滅するのである。「わたしの羊は、わたしの声に聞き従う」(ヨハネ10・27)とはこのことである。即ち「わたし」の声に目覚めた者は、自己完結的自我が消滅し「わたしの羊」となり「わたし」に従う自我になる。

自己完結的自我とは自己絶対化である。そこから生れる知情意・つまり分別知が人に思いわずらいを生み、エゴイズムを生み出す、また父、母、子、兄弟、姉妹、他人などと分別する。しかしイエスさまは申される。「だれでも、父母妻子、兄弟姉妹、さらに自分の命までも捨て

てわたしのもとに来るのでなければ、わたしの弟子となることは出来ない」と、(ルカ14・26)

エゴイズム、思いわずらいなどの分別は、自我を自我たらしめ保たしめる自我の財産なのである。その財産を捨て切らなければ、自我は本来的自我になることは出来ない。「自分の財産をことごとく捨て切る者でなければ、わたしの弟子となることは出来ない」(ルカ14・33)

「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを救う」
(ルカ9・24)

自己完結的自我は真実の自己に出会い目覚めるとき、自然に消滅して本来的自我になる。再度言うが、自我が消滅するのではない、自己完結的自我が本来的自我に成るのである。正気の自我になるのである。(ルカ9・26-34) 正気の自我になるときは本来的生に立つのである。ここで再び、わたしの体験の一つを語らせていただきたい。それは四年前の七月も十日のことであった。それまで自分の真底だと思いついてきた罪の向う側に突然ヒョイと出てしまったのである。どうしてそうなったのか私にはわからない。結果は罪が私の中から全く消えて無くなったのである。

かつて、イエスさまの十字架の贖罪しよぐわいに接することによって罪から救われたという体験もっていたが、それとは異なる一層深い自然な開放感なのである。つまりイエスさまの贖罪しよぐわいを信じたときの開放感は未だ不徹底だったと感じるような開放感なのである。罪から解放されたと感じ

よるこびつつも尚未だ、罪人にもかかわらず罪から開放されたと信じる信仰であった。それが信じる信仰によるのでなく、永遠の過去より永遠の未来に至るまで、罪とは全く関係なく、全き自由な私がそこにあった、という真実の自己の姿の発見であり覚であったのだ。わたしは、はじめから救われていたのである。救われない自己など、はじめから無かったのだ。にもかかわらず救われねばならぬ罪人なる自己があると思ひ込んでいたことが、自我のなせる幻想にかすぎなかったのだという自己の自覚である。

みちしるべ文庫 22

自我の向うがわ ーひとつの覚え書きー

1986年10月25日

1999年 8月15日 第二刷発行

著 者 松 下 昌 義

発 行 所 著者 左京キリスト教会出版部
京都市左京区下鴨南茶ノ木町29
TEL (075) 781-9640
振替口座 京都 5-40566

片 桐 軽 印 刷 (有)

TEL (075) 492-6652